

博士論文審査結果の要旨

提出者 戸田 勝久

戸田勝久氏は、裏千家戸田即日庵（東京日本橋所在）に生まれ、五代にわたる茶の湯の家の跡を継いで活躍する茶道家で、かつ茶の湯の歴史を研究している篤学の士であって、学術研究書としてはすでに『武野紹鷗研究』（中央公論美術出版、昭和44年）を上梓した実績をもっている。

戸田氏の提出した論文『武野紹鷗 茶と文藝』は、大きく①「侘び茶とは何か」、②「紹鷗遺文考」、③「紹鷗余滴」、④「連歌師たちの茶の湯」の四部からなり、付篇として「[史料紹介] 杉木普齋筆「紹鷗棚傳」」が添えられている。

①「侘び茶とは何か」は、さらに「茶道の調和と戦い」「珠光と紹鷗の間」「紹鷗を基点として考える」「侘び茶の人脈をたどる」「侘び茶の成立と連歌」の五章からなる。冒頭の「茶道の調和と戦い」においては、茶の湯の始祖とされる村田珠光（一四二三～一五〇二）、侘び茶の元祖とされる武野紹鷗（一五〇二～五五）、大成者とされる千利休（一五二二～九一）を中心に据えて、茶の湯の成立する背景として鎌倉末期・南北朝時代の武家の気風から、唐物珍重や藝能愛好の室町時代へという時代的展望のもと、一休を代表とする大徳寺の臨済禅や藤原定家を崇拜する歌僧正徹の歌論などが、珠光や紹鷗へと注ぎこまれる文化伝統をさぐり、江戸初期の小堀遠州（一五七九～一六四七）や細川三斎（一五六三～一六四五）らをしかるべく位置づけ、徳川将軍家の柳営茶道を導いた片桐石州（一六〇五～七三）の石州流まで、茶道が成立し展開するまでの歴史を描き出す。

「珠光と紹鷗の間」では『烏鼠集四巻書』『山上宗二記』など、なるべく古い資料のみにもとづいて、紹鷗の伝記に即した師承関係の系譜をさぐり、利休以前の茶の湯のありようを考察しており、「紹鷗を基点として考える」では、遠州には利休→古田織部→遠州という利休の侘びを継承した系譜があるほかにも、紹鷗の侘び茶に含まれる装飾性、文学性、器物偏重志向を受け継ぐ紹鷗→津田宗及→江月宗玩（宗及の次男）→遠州という系譜を新たに掘り起こす。

②「紹鷗遺文考」は、紹鷗の作とされる二つの作品、「十箇條の法度」と「侘びの文」についての注釈的な考察である。前者においては「紹鷗門弟への法度」十二箇条と松平治郷（号不昧。一七五一～一八一八）筆「紹鷗の十箇條」とを比較し、不昧の解釈をも読み取りつつ、紹鷗の功績の大きさを論じており、茶器名物への銘直書付けや茶掛けにおける墨跡から和歌へなどの功績を指摘し、三条西実隆のもとで和学を身につけたことが重要で、とりわけ定家『詠歌大概』を拝受し定家色紙を好んだことにつき、広く時代的・文化的にさまざまな系譜を重ね合わせて考察する。ただし、せつかく川上太白筆「紹鷗侘之消息」の写真版を掲載しながら、これを活用していないことが惜しまれ、また歌人・連歌作者・能作者の発言のほかにも、謡曲の詞章の影響がありそうなことも指摘された。後者の「侘びの文」では注釈的な考察に加えて、戸田氏の発見になる東北大学附属図書館蔵の速水宗

達（一七三九～一八〇九）自筆『鬼言類聚』所載「紹鷗利休ニをくりしふみ」の親本の素性や伝来についても探索する。ここでは、不昧流の治郷や速水流の宗達として茶道史に名を残す両名が、それぞれの作品を紹鷗の遺文として尊んだ心の機微を捉えることに成功している。

本論文において中心となるのは①と②であるが、③以下についても簡単に触れると、③「紹鷗余滴」の中の「茶書のなかの紹鷗」は、最も古い茶書三点から紹鷗を論じる際に根幹となるべきその親族、師筋、侘び茶の理念思想、所作風躰を取り出してまとめ、「紹鷗と好雪片々と」は、紹鷗の道号が黄庭堅の詩にあり、大林宗套（一四八〇～一五六八）がこれを授けたという『堺市史』の提言をめぐる考察で、子孫である宗朝の考証的な資料を排して、大林の師筋の古岳宗亘（一四六五～一五四八）による授与と考え、紹鷗の侘び茶のよりどころを実隆と古岳に求め、古岳による感化を高く評価する。④「連歌師たちの茶の湯」は茶の湯とかかわりのありそうな正徹・能阿弥・専順らから紹巴まで十二名の略伝をまとめたものである。

審査委員からは、考察の対象を古い資料に限り、それぞれの偏向性をも吟味したうえで論じる学問的な姿勢は高く評価するが、それでも、どうしても後代の伝承を手がかりとせざるを得ない側面についてなお疑問が残るとされたほか、連歌という座の文芸そのものと茶の湯との本質的なかかわりについての考察がやや弱いという意見があり、また、展望的な論述は時代状況としての文化や学藝の雰囲気をよく伝えているが、紹鷗への決定的な影響を見るには詰めの部分に甘いところがありはしないかとか、「侘び」にこだわるよりも、『詠歌大概』の「情は新しきをもつて先とし、詞は旧きをもつて用うべし」や定家の「いはりのなき世なりけり」の歌の、侘び茶の精神への影響を掘り下げる必要があったのではないか、という指摘もあった。紹鷗を実隆に引き合わせた「印政」という経歴不明の人物については、近年完成した連歌データベースで検索すると、周桂と肩を並べる連歌作者と見られる、という新事実の指摘も審査委員からなされた。

以上、歴史学や連歌史・能楽史の側から有益な指摘がなされたが、いずれも本論文の価値を損なうものでなく、従来の研究を一步も二歩も進めたという高い評価を得た。よって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。